

昭和56年度組織的調査研究活動推進事業報告 (久米島におけるトビイカ釣り漁業)

嘉 数 清

1. 目的および内容

本県周辺海域には豊富なトビイカ資源があると考えられており、今後のトビイカ漁業の発展が期待されているが、現実のトビイカ生産量は昭和49年の358トンから55年の118トンまで減少している。トビイカ漁業の振興を図るためには解決すべき種々の問題点があると考えられる。本調査は、久米島地域におけるトビイカ釣り漁業の現状を明らかにし、同地域のトビイカ漁業を振興する上での問題点を抽出し、その対応策を検討することにより、本県におけるトビイカ漁業の発展を促進することを目的とする。昭和56～57年度の2カ年継続の調査であるが、初年度の56年度においては、久米島地域におけるトビイカ釣り漁業の現状について、地元における聞き取り調査、漁協セリ台帳の集計・分析、標本船調査等を実施した。

調査結果の詳細は「昭和56年度組織的調査研究活動推進事業報告書（久米島におけるトビイカ釣り漁業）」（沖水試資料No.63）に報告したので、ここでは要約を記す。

2. 成果の要約

- (1) 久米島におけるトビイカ釣り漁業は、島のすぐ近くの漁場において、比較的簡単な漁具漁法である伝統的な“引っかけ漁法”によって営まれている。
- (2) トビイカ釣り漁業はトビイカだけの漁獲が目的ではなく、マグロ、メカジキなど他の漁獲物をもねらっており、トビイカ以外の漁獲物に対する依存度はかなり高い。
- (3) トビイカ釣り漁業者は、トビイカ以外の時期には引き縄、刺し網、一本釣りなど他の漁業に従事している。トビイカの漁期であっても状況によって他の漁業に出漁する。
- (4) トビイカ釣り漁業は1～2トンのサバニ漁船が主体となって、昭和56年には7月下旬から12月下旬まで行われた。全期間を通じての平均漁獲量は1出漁日当たり20～25kgと考えられた。
- (5) 久米島周辺におけるトビイカ資源量は年により変動するが、56年のトビイカ釣り漁業は55年に比べて好漁であった。本報告では久米島の56年のトビイカ生産量を49～61トンと推定した。
- (6) 56年には少なくとも漁家の半数以上はトビイカ釣り漁業に出漁したが、全体的な出漁日数は少なく、盛漁期には操業時間も短くなることから、久米島のトビイカ釣り漁業は需要量によって制限されている状況にあると思われた。
- (7) 久米島漁協のセリ市場におけるトビイカ価格は、品質、時期及び搬入量によって変動した。
 - ① 個々の取引価格では1kg当たり100～950円の変動をしたが、250円以下の取引量は極めて少なく、通常の状態での最低価格は300円であった。850円以上の価格も異例に属した。

② 漁期初めから9月上旬までの期間は高値であるが、9月中旬～11月下旬の盛漁期には安くなり、12月になって再び高値となる。

③ 9月上旬までの期間では、セリ市場への搬入量が300kg以下であれば1kg当り600円以上の価格であるが、300kg以上の搬入があると価格は大幅に下落する。

④ 9月中旬以降の盛漁期には、100kg以下の搬入量であれば450円前後の価格となるが、100～200kgの搬入量のときには400円前後となり、200kg以上の搬入になると350円程度にまで下る。

⑤ 350kg以上のトビイカがセリ市場に搬入されると需要量を上まわることとなり、漁協の買取りによる価格保持と調整保管が必要となる。

(8) 漁協による56年のトビイカ買取り量は2,725kgで、57年1月までには全て地元で販売された。しかし、トビイカの買取り販売事業は、漁協にとって経営的なメリットはほとんどなかった。

(9) 漁協のセリ市場に搬入されるトビイカは漁獲量の約30%と見られることから、久米島全体のトビイカ需要量はセリ市場の需要量のほぼ3倍と考えた。このことから、久米島における盛漁期の1日のトビイカ需要量は、単価400円であれば600kg、350円であれば1,000kgであると推定した。

(10) 従って、久米島におけるトビイカ釣り漁業者の盛漁期の許容人数は、1カ月間の出漁日数を14～22日、1出漁日当りの平均漁獲量を25kgとすると、1kg当り400円の販売価格を希望するのであれば24人、350円を希望するのであれば40人と算出される。

(11) 久米島におけるトビイカの需要は、地元住民の自家消費と加工業者への原料イカに限られ、島外への移出はほとんどない。

(12) 加工製品はおみやげ用の塩辛ビン詰が主体であるが、塩辛品の需要低下や製品の品質変化などの問題を抱えている。

3. 今後の課題

トビイカの需要拡大を図るための問題点を明らかにし、その具体的な対応策を検討すること。